

児童における内的作業モデルと母子関係⁽¹⁾

宮本 邦雄

乳幼児期の母子関係の様相がその後の人格形成や認知発達、対人関係のあり方に強く影響することについては古くから多くの研究が行われてきたが、近年ホスピタリズムやマタernal・デプリベーション研究の延長として愛着 (attachment) 研究が増加してきた (繁多, 1988; 遠藤, 1992)。

Bowlby (1976) は、ある個体が他の個体に対して近接状態を維持しようとし、それが損なわれたときには取り戻そうとするような愛情の絆を「愛着」と定義し、それを中心概念として乳児期の母子関係理論を構成した (愛着理論の三部作、Bowlby, 1976; 1977; 1981)。母親に対する愛着は乳児が持っている生得的な傾向であり、通常4, 5ヶ月頃からは特定の対象との親密な愛着関係を形成していく。しかし、母親が乳児の接近に対して拒否的であったり、一貫性のない養育行動をとると、不安定な愛着を形成してしまう。

こうした愛着形成の個人差について、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) は、生後1年目の乳児が母親との分離-再会場面で示す行動により、次のような愛着タイプの分類方法を考案した (strange situation procedure: SSP)。A型 (avoidant; 回避型) は、母親がいなくなっても全く悲しみのサインを示さず、母親が戻ってきても、うれしそうな様子を示さない。母親との接近や接触を回避しようとする。B型 (secure; 安定愛着型) は、母親がいることで安心し、活発な探

索活動をする。母親がいなくなると悲しみのサインを示し、戻ってくると盛んに歓迎行動を示し、すぐ活発な探索に戻る。最後のC型 (ambivalent; 不安定愛着型) は、母親との分離に激しい不安を示し、再会後は強く接近や接触を求めるが、母親に抱かれてもなかなか機嫌が直らず、怒りを伴った反応をも激しく示す。こうした乳幼児期に形成された愛着パターンは、その後の対人関係や精神衛生に重大な影響を及ぼすと考えている。

これを説明するために、Bowlby (1977) は内的作業モデル (Internal Working Model: 以下IWM) という概念を導入した。例えば、母親を安全基地とする事ができるような健全な愛着を形成した子どもは、父親や祖父母などまわりの人々に対しても安定した愛着を形成し、肯定的な自己像を形成し、健全なパーソナリティを形成することができる。個人は世界について及びその中の自分自身について作業モデルを構築し、それを使用して種々の出来事を知覚し、自分の行動のプランを作ることができる。すなわち、IWMは対人関係を調整していく際の照合枠組みとなる心的表象 (事象スキーマ) として作用することになる (Main, Kaplan, & Cassidy, 1985)。現在、SSPによって乳児期に愛着のパターンが確認された子どもたちを対象とした、IWMと社会性や認知的機能の発達を検討する縦断的研究が行われており、6歳児までこの3種の愛着パターンの影響が持続していることが

確認されている (Main & Cassidy, 1988)。

成人期の IWM も乳幼児の愛着パターン (Ainsworth, et al., 1978) に対応した 3 種類のパターンが考えられている (Main et al., 1985; Kobak & Sceery, 1988)。詫摩・戸田 (1988) は、愛着 3 パターンを対立する類型としてではなく、個人内に併存する相互に独立した特性として捉え、3 因子構造 18 項目からなる尺度を構成した。これは、主に女子青年を対象とした種々の特性との関連が検討されており (異性愛, Hazan & Shaver, 1987; 親の養育態度認知, 戸田, 1988; 世代間伝達, Fonagy, 1991; 過去の対人経験, 山岸, 1994; 母性準備性, 宮本, 1994; 1997)、その妥当性は確認されている。

このように、乳幼児期の愛着の形成とその初期発達への影響、青年期や成人を対象とした IWM や異性に対する愛着の研究は近年増加してきたのに対し、児童期における愛着行動や母子関係の変化に関する研究は少ないと言わざるを得ない。

児童期のうち小学校低学年の時期と高学年では、家族関係から仲間関係へ、隣近所から学校・地域社会へと、遊び集団の拡大・社会的ネットワークの拡大が急激に進む時期である。また、身体的、運動的機能の向上、急激な認知機能の発達、欲求の分化など、種々の側面で大きな発達がみられる時期でもある。こうした発達段階において、母子を中心とした愛着関係をはじめとする対人経験も変化していくと思われるが、そのフィードバックを受けつつ IWM も多少とも修正されていくと考えられる。

児童期における IWM と母子関係を中心とした対人関係はどのような変化を示すのだろうか。本研究では、小学校 2 年生と 4 年生を対象に質問紙調査を行い、母親への愛着、母子相互作用はどのように変化していくのか、IWM とどの程度関連するのかを検討する。

方 法

被調査者：岐阜県内、長野県内の小学校 2 年生 235 名 (女子 130 名、男子 105 名)、4 年生 367 名 (女子 184 名、男子 183 名) が調査対象となった。そのうち、有効回答数は 2 年生 186 名、4 年生 325 名であった⁽²⁾。きょうだい構成については、2 年生で 1 人 7 名 (3.0%)、2 人 116 名 (49.4%)、3 人 94 名 (40.0%)、4 人以上 17 名 (7.2%)、4 年生で 1 人 13 名 (3.5%)、2 人 192 名 (52.2%)、3 人 133 名 (36.1%)、4 人以上 29 名 (7.9%) であった。きょうだい順位では、2 年生で長子 81 名 (34.5%)、次子 92 名 (39.1%)、第 3 子 45 名 (19.1%)、第 4 子以降 12 名 (5.1%)、4 年生で長子 155 名 (42.2%)、次子 145 名 (39.5%)、第 3 子 52 名 (14.2%)、第 4 子以降 12 名 (3.3%) であった。

質問紙：①フェイス・シート：学年、性別、きょうだい数、きょうだい順の質問項目。② IWM 質問項目：戸田 (1988) により作成された 18 項目 (3 下位尺度 secure、ambivalent、avoidant それぞれ 6 項目からなる) の質問紙を基に、児童に理解できるような文章に修正を加えた。③母子関係を中心とした質問項目：近藤 (1993) の愛着 Q 分類法の項目及び桑田 (1993) の幼児の愛着質問紙を参考に、家庭における児童の主として母親との相互作用に関する項目を 71 項目収集し、小学校 1～4 年生 7 名を対象に個別の予備調査を行った。その結果、理解しにくかった項目と 3 件法で「わからない」の回答が多かった 33 項目を除外し、38 項目からなる質問紙を作成した。④対乳児感情、移行対象に関する 2 項目。いずれの項目についても、「はい」、「わからない」、「いいえ」の 3 件法で回答を求め、3、2、1 点を与え得点化した。

調査時期と実施方法：1994 年 11 月～12 月に、クラス毎に担任教諭が配布し、所定の教示を行った後、調査を実施・回収した。

結果

1. 内的作業モデル質問項目の因子分析の結果

まず、2年生と4年生のデータを込みにして、IWM質問項目(18項目)について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。固有値1.0以上、因子負荷量4.0以上をめぐりに、共通性の低いものを除外し、解釈可能性や説明率を考慮しつつ因子分析を繰り返した。その結果、Bowlbyの愛着3因子モデルと

の整合性を考慮し、因子寄与率が若干低い(32.26%)3因子解を採用した(表1)。第1因子は、「友だちはしかたなく仲良くしてくれると思う、いつもだれかと一緒にいようとするのでいやだと思われている、みんなのことが信じられない」など、ambivalent(不安定愛着)因子に対応すると考えられる(固有値2.35、寄与率13.06%)。ただし、全ての項目が負の負荷量を示しており、本来的には項目の内容から安定愛着とするべきではあるが、Bowlby-Ainsworth理論の3タイプとの整

表1・児童(2、4年生)における内的作業モデル項目の因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果

項目	F1	F2	F3	h^2
ambivalent因子				
3. 友だちはほんとうは私をきらいで、しかたなく仲よくしてくれていると思う	-.59	-.05	.04	.35
17. いつもだれかといっしょにいようとするので、いやだとおもわれている	-.58	.05	.06	.34
7. みんなのことがしんじられない	-.53	-.08	.24	.35
18. 私はダメな子だと、よく思う	-.53	-.19	-.01	.31
5. 私は、ひとりでは何もできないとおもうことがある	-.49	-.15	-.18	.30
8. 友だちが、ほんとうは私をきらいだと思っていないかとしんばいになる	-.44	-.25	-.05	.26
2. 友だちと仲よくするのは好きではない	-.41	-.05	.04	.18
11. 私がよいことをしても、わかってくれないことがある	-.39	-.10	.29	.25
secure因子				
9. みんな私をすぐに好きになる	.14	.61	-.29	.47
4. 友だちがすぐできる	.17	.60	.17	.42
14. みんな私のことを好きだとおもっている	.19	.58	-.27	.44
10. 自分ひとりで何でもじょうずにできる	.07	.55	.03	.31
1. 知らない子ともすぐに仲よくなれる	-.07	.51	.21	.31
12. どんなことがあっても、友だちは私をみすてないと思う	.31	.41	-.24	.33
avoidant因子				
13. だれかにおねがい事をするのは好きではない	.10	.08	.68	.48
6. みんな私におねがいごとをするし、私もみんなにお願いごとをする	-.19	.28	-.49	.36
16. ベタベタされたりするとイライラする	-.21	.05	.39	.20
15. いつまでも仲よくしたい友だちはいない	-.28	.03	.30	.17
固有値	2.35	2.03	1.43	5.81
寄与率	13.06%	11.27%	7.92%	32.26%

合性を考慮して、不安定愛着因子とした。第2因子は、「みんな私を好きになる、友だちがすぐできる」など、secure (安定愛着) 因子に対応し (固有値2.03、寄与率11.27%)、第3因子は、「だれかにお願い事をするのは好きではない、ベタベタされるとイライラする」など、avoidant (回避) 因子と考えられる (固有値1.43、寄与率7.92%)。なお第15項目は共通性が低かったため分析から除外した。

2. 母子関係に関する質問項目の因子分析の結果

さらに、母親への愛着などに関する質問項目の因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果、次の8因子解が選択された(寄与率42.40%、表2)。まず第1因子は、「お母さんにいやがられるのではないかと心配、お母さんは仕方なく私をかわいがっているのではないか」などに負荷量が高く、不安定愛着因子と考えられる(固有値2.35、寄与率6.18%)。第2因子は、「お母さんは私のことをわかってくれないと思う(負)、お母さんは私を好きだと思っている」などで、安定愛着因子と思われる(固有値2.41、寄与率6.35%)。第3因子は、「よく遊んでくれるお客さんとはすぐ仲良くなる、お客さんがあるととてもうれしくなる」など、外向性因子と考えられる(固有値2.03、寄与率5.35%)。第4因子は、「一人で遊ぶのが好き、友だちと遊ぶよりファミコンをするのが好き」など、内向性因子と呼ぶことにする(固有値1.78、寄与率4.70%)。さらに第5因子として、「いつも一人で寝ている、おふろには一人ではいる」などに負荷量が高く、身辺自立因子と呼ぶことにする(固有値2.01、寄与率5.29%)。第6因子は、「工作などでだれかに手伝ってほしいと思う(負)、宿題をお母さんに手伝ってほしいと思う(負)」などに負の負荷量をもち、母親からの自立因子と考えられる(固有値1.93、寄与率5.07%)。第7因子は、「お母さんがいなくてもさみしくない、お母さんをあてにしていない」などで、母親からの分離因子と名付けた(固有値1.92、寄与率5.05%)。最後に第8因子

は、「帰ってからぐずぐず言うことがある、いったん泣き出すと激しく泣く」などに高い負荷量をもち、母親への情動的依存因子と考えた(固有値1.68、寄与率4.43%)。

3. IWM因子と母子関係因子との関連

IWM各因子と母子関係各因子間の関連を検討するため、各因子の合計得点を求め相関係数を算出した。表3に示すように全体的に低い値であったが、IWMのambivalent因子と母子関係の内向性因子(.12)、母親への依存因子(.15)に低い正の相関がみとめられた。またsecure因子と母子関係の外向性因子(.21)、母親からの自立因子(.14)、母親からの分離因子(.14)との間に低い正の相関がみられ、IWMのavoidant因子と母子関係の外向性因子(.14)にも低い正の相関がみとめられた。

さらに、赤ちゃんに対する感情や移行対象とIWM、母子関係との関連をみるために、Q57、Q58の得点とIWM各因子、母子関係各因子間の相関係数を求めた。Q57「赤ちゃんが好き」項目とIWMのsecure因子(.11)、母子関係の安定愛着因子(.10)、外向性因子(.11)、母親への依存因子(.11)とに低い正の相関がみとめられた。また、Q58「大切にしているぬいぐるみがある」とに正の相関(.19)がみとめられた。

4. IWM各因子得点と母子関係各因子得点の学年差と性差

さらに各因子の平均合計得点をもとに、学年と性差の2要因分散分析を行ったところ表4に示す結果が得られた。

IWMのambivalent因子には学年差・性差ともに有意ではなかったが(図1)、secure因子(図2)では2年生($F=18.830$, $df=1/584$, $p<.001$)、女子が高く($F=6.101$, $df=1/584$, $p<.05$)、avoidant因子(図3)では男子が高い($F=6.001$, $df=1/587$, $p<.05$)。

母子関係においても、図5に示すように安定愛着因子は2年生($F=6.486$, $df=1/585$, $p<.05$)、女子が高く($F=21.583$, $df=1/$

表2 児童(2, 4年生)における母子関係項目の因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	h^2
不安定愛着因子									
54. いつもお母さんといっしょにいたいと思うので、いやがられるのではないかと心配	.69	-.08	-.01	.11	-.12	-.08	-.15	.03	.54
56. お母さんは、しかたなく私をかわいがっているのではないかと心配	.69	-.17	-.01	.01	-.09	.03	.12	.18	.56
47. お母さんがほんとうに私が好きか心配	.63	-.17	-.03	.00	-.04	-.17	.05	.10	.47
33. 学校から帰ってきて、お母さんが家にいるか心配	.54	.11	.13	-.06	-.08	-.42	-.18	-.11	.54
安定愛着因子									
26. お母さんは私のことをわかってくれな いと思う	.19	-.62	.05	.20	.06	.08	.05	.16	.50
49. お母さんは私を好きだと思っている	-.17	.61	.25	.08	-.08	-.05	-.15	.08	.51
53. お母さんには、はらがたつことがたくさんある	.14	-.59	.03	.16	.05	-.03	.12	.19	.45
31. お母さんにベタベタされるとイライラする	.04	-.50	-.05	-.09	.04	-.11	.25	-.22	.39
45. 学校でいやなことがあっても、お母さんに話すといやな気もちがなくなる	.38	.47	.24	-.03	-.06	-.12	.07	-.15	.47
外向性因子									
41. 家にくるお客さんで、よく遊んでくれる人とはすぐに仲よくなる	-.04	-.04	.71	.09	.01	.11	-.09	-.02	.54
43. 家にお客さんがいると、とてもうれしくなる	.15	.22	.62	.04	-.16	-.16	.08	-.07	.52
21. お父さんお母さん以外の大人とも、気軽に話をする	-.01	.02	.53	-.15	.03	-.05	-.04	-.04	.31
27. はじめにはずかしがっていた人や、こわがっていた物にもすぐになれる	-.06	-.06	.43	-.38	.19	.13	-.06	-.02	.40
内向性因子									
20. ひとりであそぶ事が好き	-.08	.00	.12	.61	.16	-.12	.15	.14	.47
50. 友だちとあそぶより、ファミコンをするほうが好き	-.08	-.07	.04	.52	-.02	-.24	.41	.06	.52
23. ほとんどいつも元気でほがらか	-.06	.21	.23	-.50	.01	.06	.05	.01	.36
36. 学校から帰ると、たいてい友だちと遊ぶ	-.14	-.22	.33	-.49	.12	-.23	.12	.00	.49
35. お母さんが自分いかに家族と仲よくするとイライラする	.17	-.18	.03	.37	-.04	-.06	-.27	.09	.29
身辺自立因子									
34. いつも一人でねている	-.04	-.02	.02	-.09	.70	.04	-.01	.02	.50
24. 一人でねるのは好きではない	.08	-.07	.09	-.03	.66	-.12	-.07	.12	.49
42. おふろには一人ではいる	-.06	-.04	.03	.01	.57	.06	.08	-.03	.34
39. 家の中では、たいていお母さんとはべつの部屋であそぶ	-.08	-.24	.09	.08	.44	.09	.06	-.09	.29
母親からの自立因子									
40. こう作などのときに、だれかにてつだってほしいと思う	-.04	-.05	-.04	.19	-.07	-.57	.01	.08	.38
38. 宿題をするとき、いつもお母さんにてつだってほしいと思う	.10	-.02	-.05	-.09	-.15	-.53	.09	.23	.38
29. 外から帰ってきて、お母さんがいないとイライラする	.21	.05	-.01	.10	-.03	-.51	-.05	.09	.33
28. お母さんにいろいろとたよるのは好きではない	.00	-.25	.11	-.03	-.21	.40	.21	-.30	.41
55. たいくつするとお母さんのところへいき、何をしたらいいかきくことがある	.20	.02	.11	.07	-.16	-.39	-.12	-.06	.26
母親からの分離因子									
48. お母さんがいなくてもさみしくない	-.14	-.10	-.06	-.06	.23	-.02	.55	-.21	.44
46. お母さんをあまりあてにしていない	.16	-.33	.06	.09	-.06	.19	.54	-.10	.49
44. 何でも一人でできる	.24	.29	.05	-.25	.26	.30	.47	.14	.60
30. 学校であった楽しかったことなどをお母さんに話す	.12	.19	.28	-.11	.11	-.02	-.45	-.14	.38
37. お母さんとどこかにいっても、お母さんからはなれて遊ぶ	-.03	-.25	.05	.12	.21	.03	.44	.11	.33
母親への情動的依存因子									
19. 家に帰ってきてから、理由もなくぐずぐずいうことがある	-.02	-.17	-.12	-.06	-.07	-.16	.12	.52	.36
22. いったん泣きだすとほげしく泣く	.03	-.11	-.09	.22	.01	-.13	.05	.50	.34
25. お母さんにだきついたり、あまえたりする	.14	.23	.07	.08	-.25	-.08	-.26	.46	.43
51. お母さんに何かしてほしいときに、泣くことがある	.31	-.11	-.02	.04	-.03	-.27	-.13	.43	.39
32. 人形やぬいぐるみのような、生きものの形をしたおもちゃが好き	.14	.12	.31	-.00	-.26	.06	-.15	.41	.39
52. お母さんとゲームなどをして遊ぶことがよくある	.12	.17	.31	.06	.07	.16	.06	.29	.26
固有値	2.35	2.41	2.03	1.78	2.01	1.93	1.92	1.68	16.11
寄与率	6.18%	6.35%	5.35%	4.70%	5.29%	5.07%	5.05%	4.43%	42.40%

表3 IWM各因子と母子関係各因子間の相関係数

IWM	母子関係因子							
	不安定愛着	安定愛着	外向性	内向性	身辺自立	母親自立	母親分離	母親依存
ambivalent	.05	.01	.08	.12**	.06	-.02	.03	.15**
secure	-.03	.06	.21**	.06	-.01	.14**	.14**	.06
avoidant	-.03	.06	.14**	-.02	-.03	.08	.10	.06

**p<.05 **p<.01

表4 各因子得点の学年×性別の分散分析の結果
(学年×性別の交互作用はいずれも有意ではなかった)

	IWM	
ambivalent	ns	ns
secure	2年>4年***	女子>男子*
avoidant	ns	女子<男子*
	母子関係	
不安定愛着	2年>4年***	女子>男子*
安定愛着	2年>4年*	女子>男子***
外向性	ns	ns
内向性	2年>4年*	女子<男子***
身辺自立	2年<4年***	ns
母親自立	ns	ns
母親分離	2年>4年*	女子>男子***
母親依存	ns	女子>男子***

*p<.05、**p<.01、***p<.001

585, $p < .001$)、不安定愛着因子(図4)も2年生($F=16.102$, $df=1/694$, $p < .001$)、女子($F=5.911$, $df=1/594$, $p < .05$)の方が高いことがみとめられた。外向性因子(図6)と母親からの自立因子(図9)には有意な傾向はみとめられなかった。しかし、内向性因子(図7)と母親からの分離因子(図10)では、2年生(内向性 $F=3.892$, $df=1/592$, $p < .05$ 、母親分離 $F=5.73$, $df=1/591$, $p < .05$)、男子(内向性 $F=43.914$, $df=1/592$, $p < .001$ 、母親分離 $F=54.048$, $df=1/591$, $p < .001$)が高得点を示した。また、身辺自立因子(図8)では4年生($F=41.558$, $df=1/591$, $p < .001$)、母親への情動的依存因子(図11)で女子($F=26.821$, $df=1/586$, $p < .001$)が高いことがわかった。

きょうだい構成、きょうだい順位についても分散分析を行ったが、いずれの因子にも有意差はみられなかった。

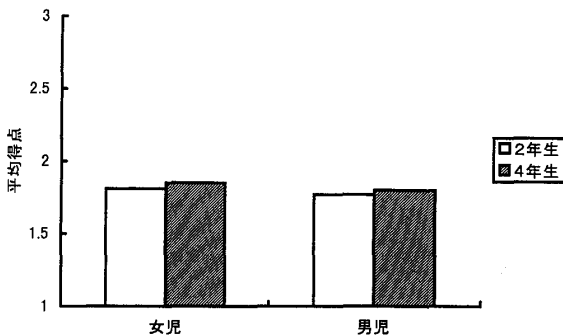


図1 IWMのambivalent因子における学年差と性差

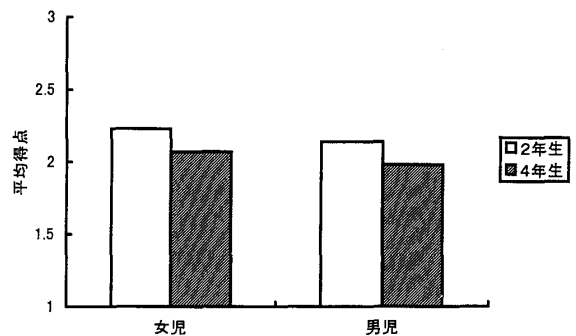


図2 IWMのsecure因子における学年差と性差

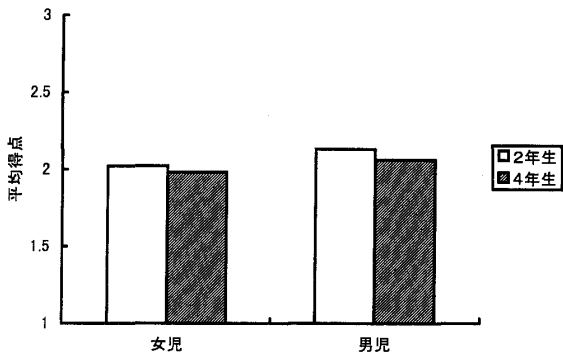


図3 IWMのavoidant因子における学年差と性差

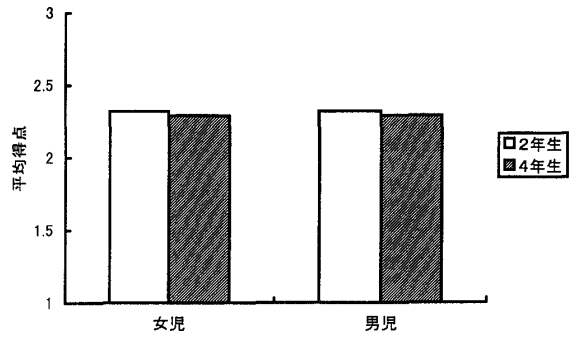


図6 母子関係項目の外向性因子における学年差と性差

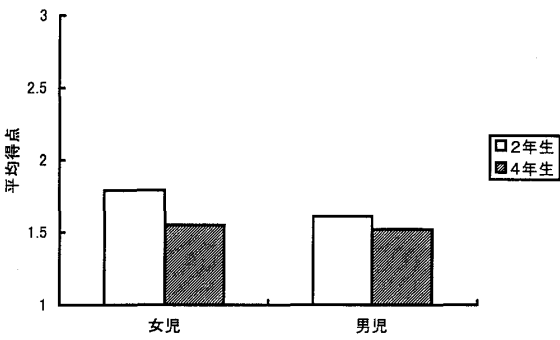


図4 母子関係項目の不安定愛着因子における学年差と性差

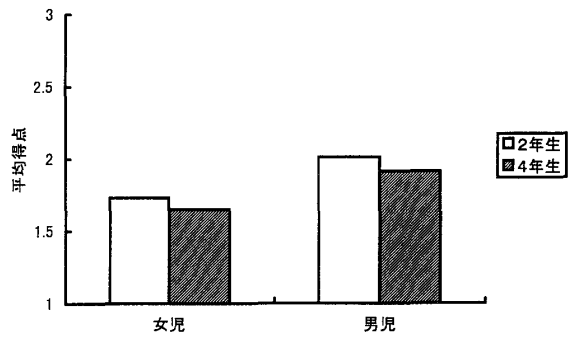


図7 母子関係項目の内向性因子における学年差と性差

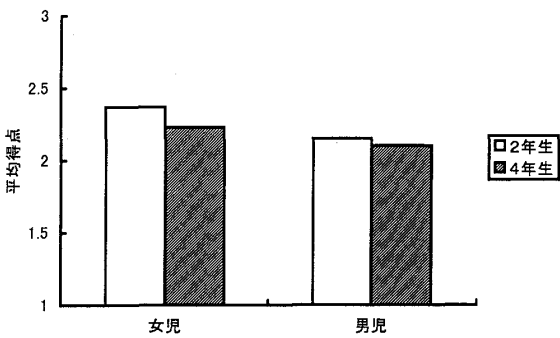


図5 母子関係項目の安定愛着因子における学年差と性差

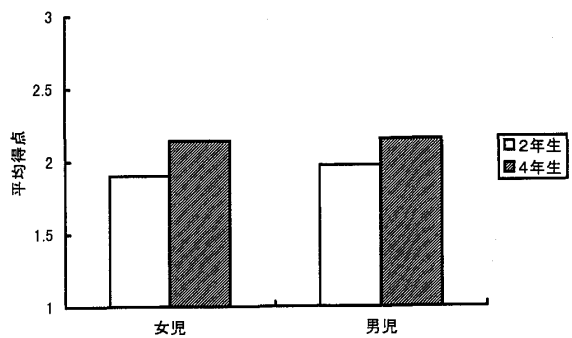


図8 母子関係項目の身辺自立因子における学年差と性差

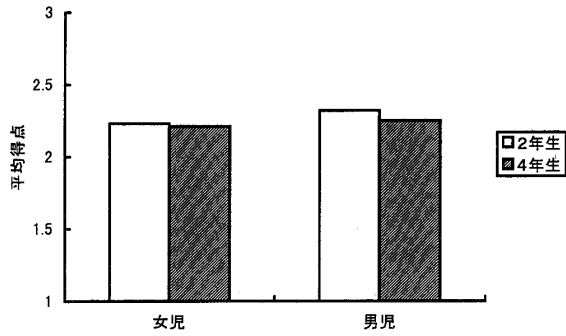


図9 母子関係項目の母親からの自立因子における学年差と性差

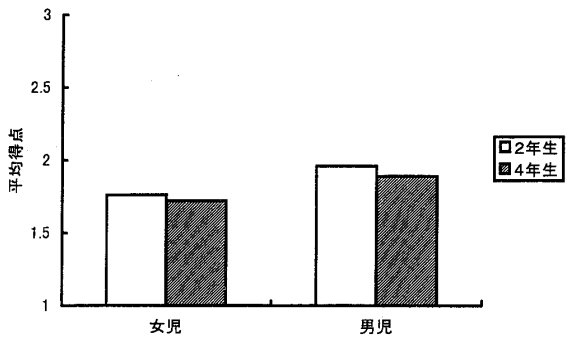


図10 母子関係項目の母親からの分離因子における学年差と性差

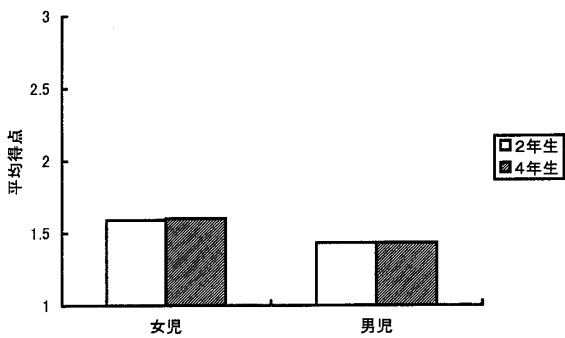


図11 母子関係項目の母親への情動的依存因子における学年差と性差

5. IWM項目毎の反応の分析

学年間の差と性差をさらに詳細に検討するため、IWM各因子毎に各質問項目に対する「はい」、「わからない」、「いいえ」の反応分布の学年差と性差(学年毎)を χ^2 検定によって分析した(セル内の頻度が5以下の場合には他の反応との合計値を用いた)。まず、図12に示すようにambivalent因子項目では、Q3「友だちは本当は私が嫌い、しかたなく仲良くしてくれていると思う」($\chi^2=34.031$, 以下 $df=2$)、Q17「いつも誰かと一緒にいようとするので、いやだと思われる」($\chi^2=10.995$) に対して「わからない」が4年生で多く、「はい」は20%以下である。Q7「みんな

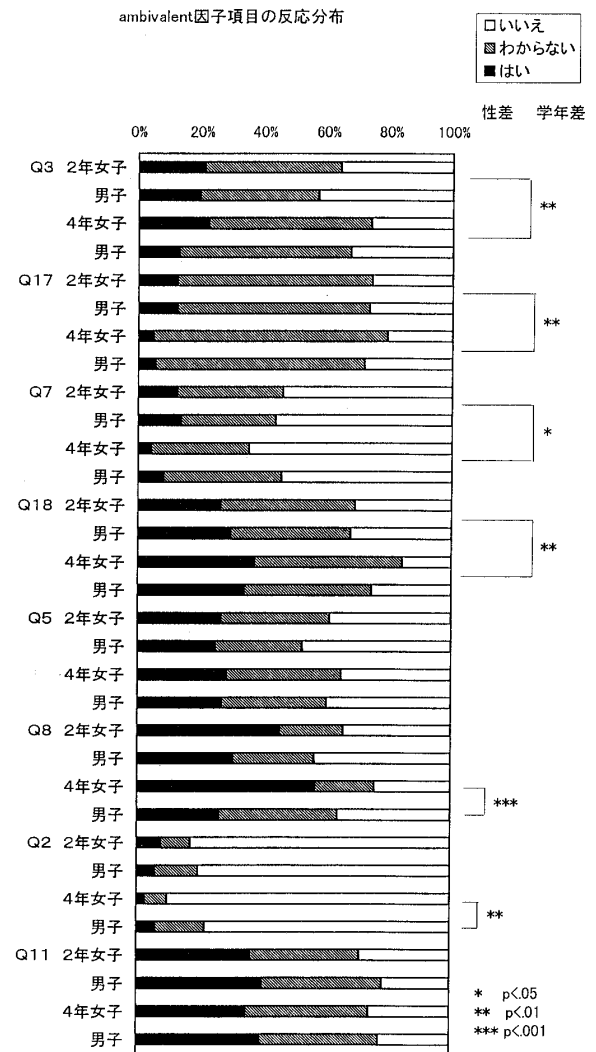


図12 IWM ambivalent因子項目の反応分布と学年差・性差

なのことが、信じられない」も「はい」は少ないが2年生の方が多かった ($\chi^2=7.873$)。Q2「友だちと仲良くするのは好きではない」もほとんどが「いいえ」であった(4年生女子>男子, $\chi^2=9.769$, $df=1$)。Q18「わたしはダメな子だと、よく思う」は、4年生の方が「はい」、「わからない」が多い ($\chi^2=9.691$)。Q8「友だちが、本当は私を嫌いだと思っていないかと心配になる」は、女子で「はい」が多い傾向があり50~60%を示した ($\chi^2=36.068$)。Q5「私は、一人では何もできないと思うことがある」、Q11「私が良いことをしても、わかってくれないことがある」では、ほぼ均等に反応が分布した。

secure因子についてはいずれの項目も学年差が有意であり(図13)、2年生が肯定的反応を多く示した。Q9「みんな私をすぐに好きになる」($\chi^2=75.914$)、Q14「みんな私のことを好きだと思っている」($\chi^2=20.174$)に対

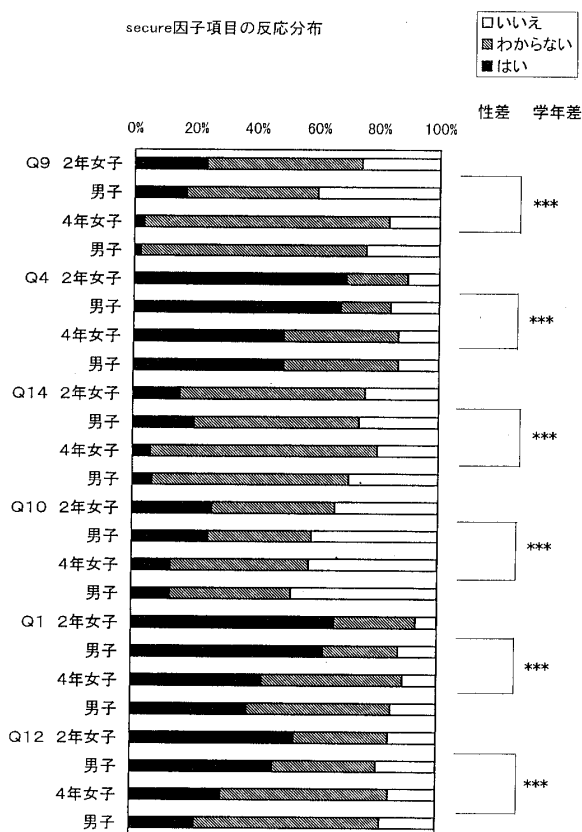


図13 IWM secure因子項目の反応分布と学年差・性差

して、4年生の80%が「わからない」と反応した。Q10「自分一人で何でもじょうずにできる」は反応が均等に分布し ($\chi^2=16.984$)、Q4「友だちがすぐできる」($\chi^2=26.319$)、Q1「知らない子とも、すぐに仲良くなれる」($\chi^2=34.301$)、Q12「どんなことがあっても、友だちは私を見捨てないとおもう」($\chi^2=44.084$)は2年生の50%以上が「はい」と答えている。

最後のavoidant因子についても全てに学年差が有意であり(図14)、「はい」が2年生で多くなっている。Q13「誰かにおねがい事をするのは、好きではない」(逆転項目, $\chi^2=9.309$)、Q6「みんな私にお願いごとをするし、私もみんなにお願いごとをする」($\chi^2=8.163$)、Q16「ベタベタされたりするとイライラする」($\chi^2=6.997$)は30~60%が「はい」と反応している。いずれの因子にも属さなかったQ15「いつまでも仲良くしたい友だちはいない」に対しては80~90%が「いいえ」と答えた。以上の結果は全体として因子得点の学年差、性差の傾向と一致している。

6. 母子関係項目の反応分布の分析

母子関係項目の反応分布の学年差と性差についても同様に χ^2 検定を行った(図15~図

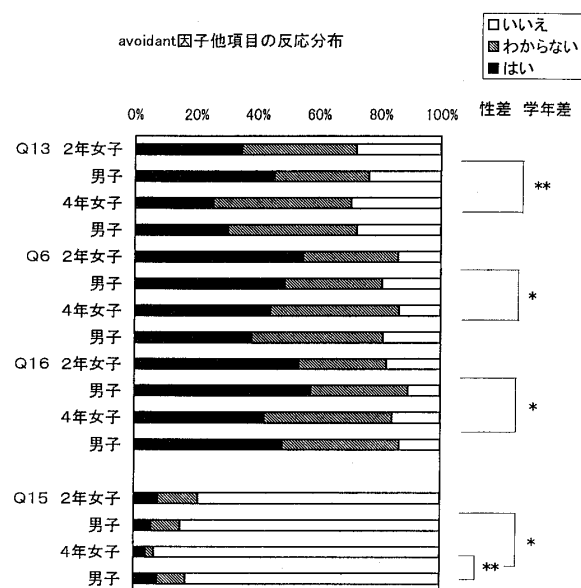


図14 IWM avoidant因子他項目の反応分布と学年差・性差

23)。その結果、まず不安定愛着因子については(図15)、全体的に否定的反応が多いことがわかる。Q54「いつもお母さんと一緒にいたいと思うので、いやがられるのではないかと心配です」($\chi^2=12.019$)、Q56「お母さんは、しかたなく私をかわいがっているのではないかと心配です」($\chi^2=16.002$)、Q47「お母さんが本当に私のことが好きか心配です」($\chi^2=6.128$)、Q33「学校から帰ってきて、お母さんが家にいるか心配です」($\chi^2=9.793$)と、いずれの項目に対しても「はい」は10~20%であり、2年生の方が有意に多い。また、2年生において女子で肯定的反応が多い傾向がみられた(Q33、 $\chi^2=6.137$)。

次に、安定愛着因子については(図16)、Q49「お母さんは私を好きだと思っています」、Q45「学校でいやなことがあっても、お母さんに話すといやな気持ちなくなります」では、30~50%が「はい」と反応し、2年生(Q49、 $\chi^2=12.169$ 、Q45、 $\chi^2=28.107$)、女子で多い傾向がみとめられた(Q49、 $\chi^2=7.214$ 、Q45、 $\chi^2=7.114$)。また、Q31「お母さんにべ

タベタされるとイライラします」では2年生の方が「いいえ」が少なく($\chi^2=9.226$)、両学年とも男子の方が「はい」が多い(2年生 $\chi^2=9.23$ 、4年生 $\chi^2=16.363$)。Q53「お母さんには、腹が立つことがたくさんあります」に対しては、40~50%が「いいえ」と反応し、Q26「お母さんは私のことをわかってくれないと思います」にも否定的反応が過半数を占め、学年差・性差とも有意ではなかった。

外向性因子項目については全体的に肯定反応が多く(図17)、Q41「家にくるお客さんで、よく遊んでくれる人とはすぐに仲良くなります」、Q21「お父さんお母さん以外の大人とも、気軽に話をします」に対しては「はい」が60%程度を示した。Q43「家にお客さんがいると、とてもうれしくなります」では各反応が均等に分布した。学年差・性差は、Q27「はじめにはずかしがっていた人や、こわがっていた物にもすぐに慣れます」のみに有意差がみられ、4年生の方が多く($\chi^2=7.071$)、2年生で男子が多い傾向がみられた($\chi^2=$

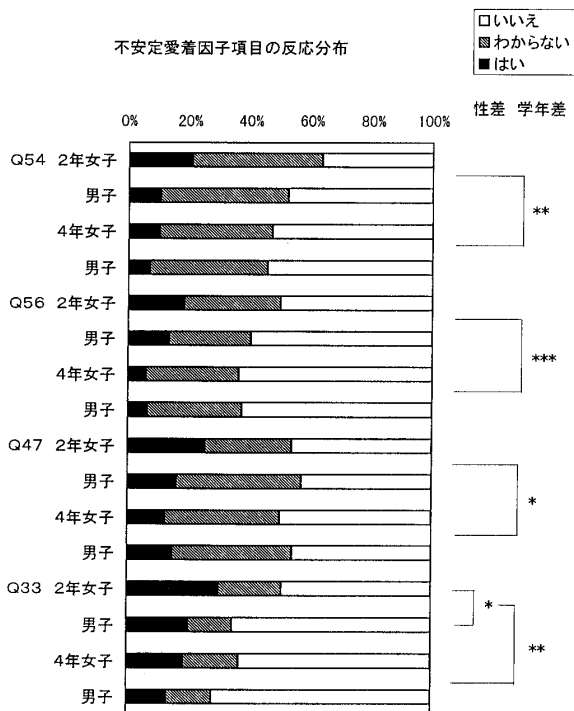


図15 母子関係の不安定愛着因子項目の反応分布と学年差・性差

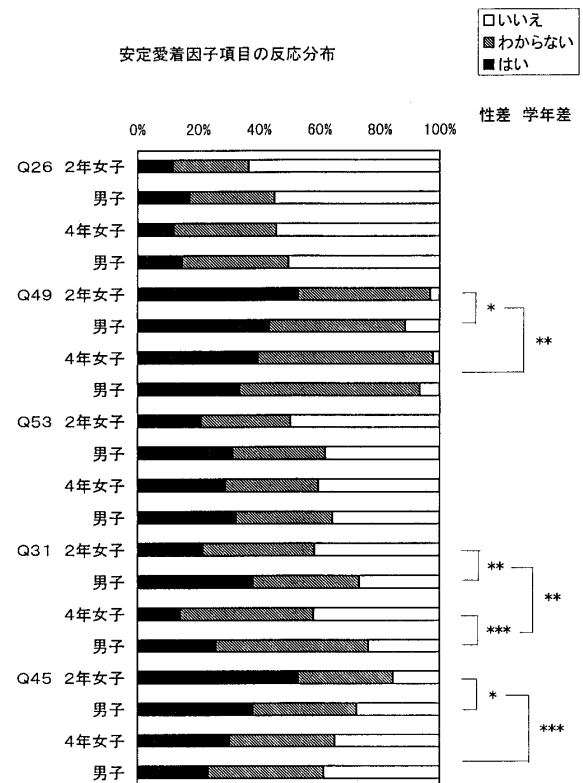


図16 母子関係の安定愛着因子項目の反応分布と学年差・性差

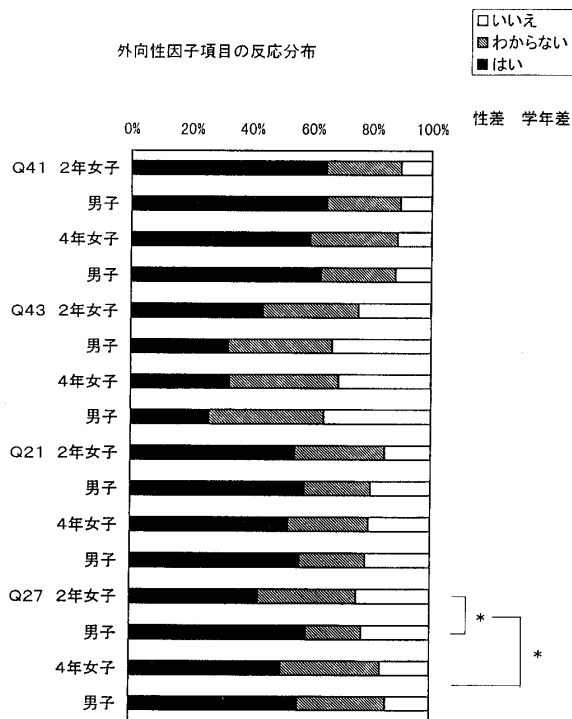


図17 母子関係の外向性因子項目の反応分布と学年差・性差

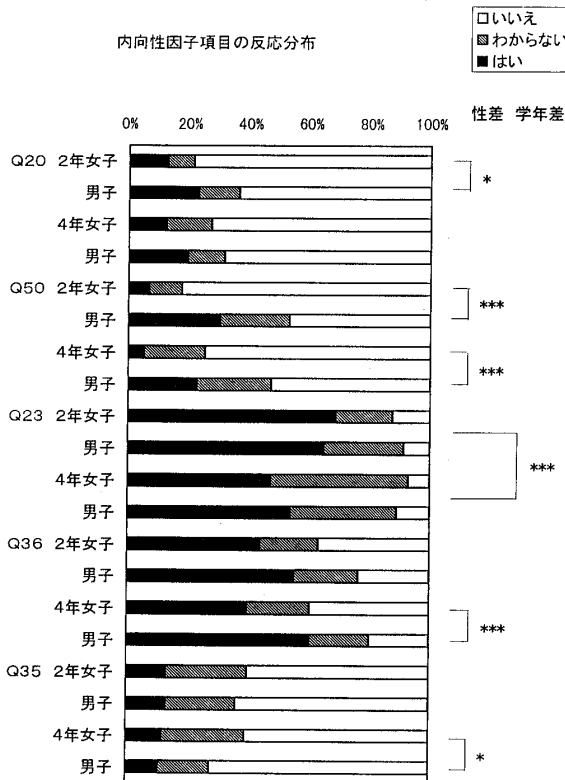


図18 母子関係の内向性因子項目の反応分布と学年差・性差

7.530)。

一方、内向性因子については図18に示すように、Q20「一人で遊ぶ事が好きです」、Q50「友だちと遊ぶより、ファミコンをするのが好きです」に対しては50~80%が「いいえ」の反応を示し、男子が「はい」が多い(Q20、2年生 $\chi^2=6.460$ 、Q50、2年生 $\chi^2=34.833$ 、4年生 $\chi^2=27.310$)。さらに、Q23「ほとんどいつも元気でほがらかです」では、「はい」が過半数を示し、2年生の方が肯定反応が多く($\chi^2=20.859$)、Q36「学校から帰ると、たいてい友だちと遊びます」も肯定反応が特に男子で多い(4年生、 $\chi^2=19.684$)。また、Q35「お母さんが、自分以外の家族と仲よくするとイライラします」では、「はい」は10%程度であった(4年生男子<女子、 $\chi^2=6.352$)。

身辺自立因子に関しては全ての項目で学年差が有意であり(図19)、Q34「いつも一人で寝ています」($\chi^2=10.340$)、Q42「お風呂には一人で入ります」($\chi^2=82.692$)、Q39「家の中では、たいていお母さんとはべつの部屋

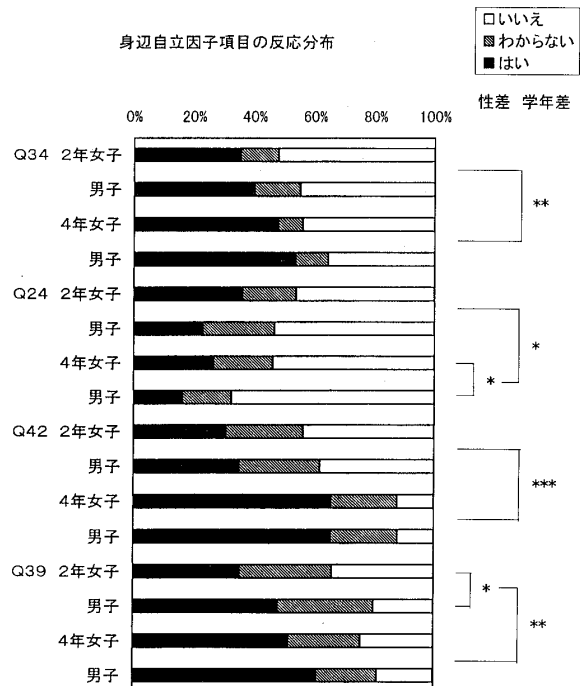


図19 母子関係の身辺自立因子項目の反応分布と学年差・性差

児童における内的作業モデルと母子関係

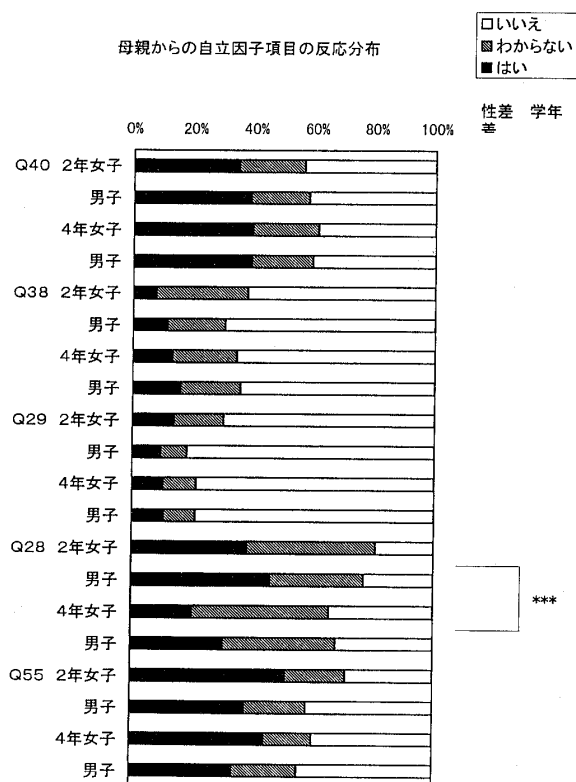


図20 母子関係の母親からの自立因子項目の反応分布と学年差・性差

であそびます」($\chi^2=13.471$)に対して、4年生が「はい」は50~70%で2年生の倍となり、2年生では女子の方が多し ($\chi^2=6.164$)。一方、Q24「一人で寝るのは好きではありません」では2年生が多く ($\chi^2=8.101$)、4年生で男子の否定反応が多い傾向が見られた ($\chi^2=7.918$)。

母親からの自立因子については(図20)、学年差がQ28「お母さんにいろいろとたよるのは好きではありません」でみられたのみであった(2年生 > 4年生、 $\chi^2=19.972$)。Q40「工作などのときに、だれかに手伝ってほしいと思います」、Q55「たいくつするとお母さんのところへいき、何をしたらいいか聞くことができます」では、反応は均等に分布した。一方、Q38「宿題をするとき、いつもお母さんに手伝ってほしいと思います」、Q29「外から帰ってきて、お母さんがいないとイライラします」に対しては、「はい」は10%程度と少なかった。

図21は母親からの分離因子の項目分析の結果

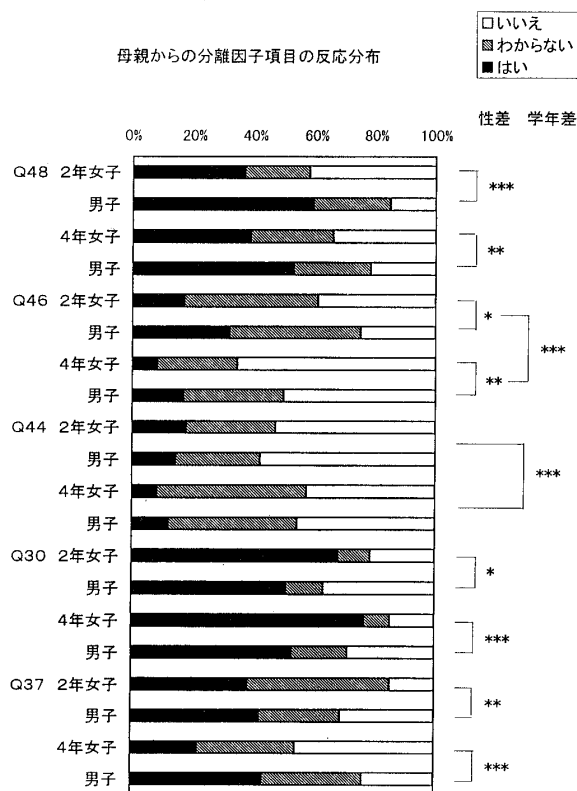


図21 母子関係の母親からの分離因子項目の反応分布と学年差・性差

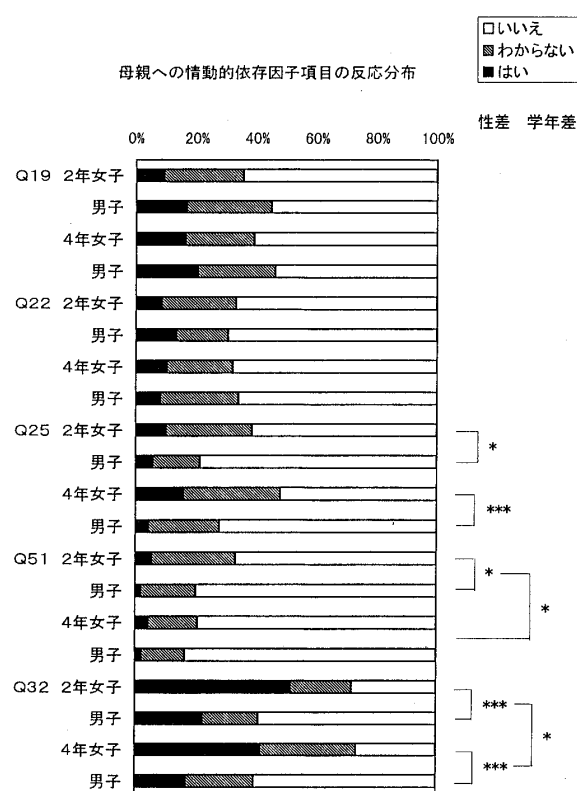


図22 母子関係の母親への情動的依存因子項目の反応分布と学年差・性差

果であるが、Q44を除いて全ての学年で性差がみとめられた。肯定反応が多かったのは、Q30「学校であった楽しかったことなどをお母さんに話します」で、男子が50%、女子は70%程度であった(2年生 $\chi^2=7.931$ 、4年生 $\chi^2=23.133$)。次に、Q48「お母さんがいなくてもさみしくありません」で女子40%、男子50~60%となった(2年生 $\chi^2=20.623$ 、4年生 $\chi^2=9.253$)。Q37「お母さんとどこかにいっても、お母さんから離れて遊びます」に対しては、2年生男女と4年生男子が「はい」を40%示したのに対して、4年生女子は20%と低かった(2年生 $\chi^2=10.732$ 、4年生 $\chi^2=25.846$)。一方、Q46「お母さんをあまりあてにしません」では、2年生男子の30%以上が「はい」を示したのに対して、その他は20%以下であり(2年生 $\chi^2=8.950$ 、4年生 $\chi^2=10.318$)、4年生の方が少ない($\chi^2=37.139$)。Q44「何でも一人でできます」は否定的反応が過半数を占め、2年生が多いことがわかった($\chi^2=18.407$)。

母親への情動的依存因子に関しては(図22)、Q32を除き否定的反応が過半数を占めたが(60~80%)、Q25「お母さんに抱きついた

り、あまえたりします」では両学年とも女子で「はい」が多く(2年生 $\chi^2=8.136$ 、4年生 $\chi^2=20.407$)、Q19「家に帰ってきてから、理由もなくぐずぐずいうことがあります」、Q22「いったん泣きだすとほげしく泣きます」には学年差、性差とも有意ではなかった。また、Q51「お母さんに何かしてほしいときに、泣くことがあります」は、ほとんどが「いいえ」だったが、学年差が有意であり($\chi^2=6.675$)、2年生では性差もみられた($\chi^2=5.012$, $df=1$)。やや異質な項目であるQ32「人形やぬいぐるみのような、生きものの形をしたおもちゃが好きです」に対しては、女子で男子の2倍にあたる50%程度が肯定反応を示し(2年生 $\chi^2=25.905$ 、4年生 $\chi^2=46.188$)、2年生の方が多し($\chi^2=7.412$)。

最後にその他の項目として(図23)、いずれの因子にも属さなかったQ52「お母さんとゲームなどをしてあそぶことがよくあります」に対しては、20%程度の肯定反応がみられた。Q57「赤ちゃんや小さな子をかかわるのが好きです」では、女子の80%が「はい」と答えたのに対して男子は40%となっている(2年生 $\chi^2=38.499$ 、4年生 $\chi^2=52.950$)。また移行対象についての質問である、Q58「寝るときにつかう、ずっと大切にしているぬいぐるみや人形があります」に対しては、2年生の方が「はい」が多く($\chi^2=20.980$)、両学年とも女子の方が多かった(2年生 $\chi^2=25.321$ 、4年生 $\chi^2=42.117$)。

考 察

1. IWMと母子関係の因子構造

まず、IWM質問項目について因子分析を行った結果、第一因子にambivalent(不安定愛着)因子、第2因子はsecure(安定愛着)因子、第3因子にavoidant(回避)因子が抽出された。戸田(1988)による青年期のIWMの3因子とはやや異なり、「友だちと仲良くするのは好きではない」、「みんなのことが信じられない」というavoidant因子に属すると考

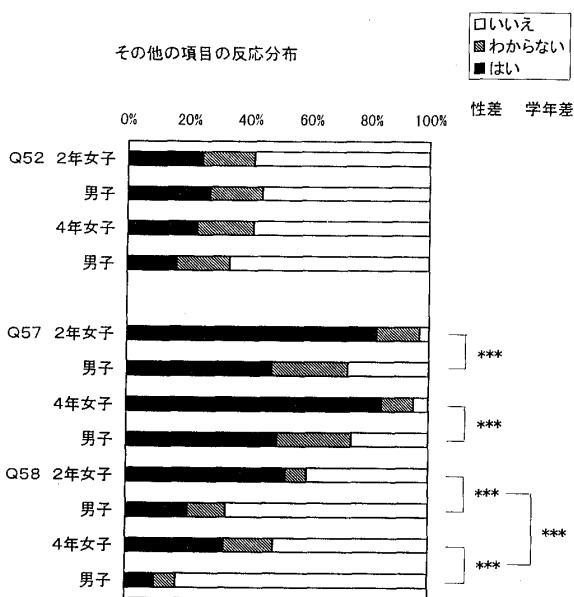


図23 その他の項目の反応分布と学年差・性差

えられた項目がambivalent因子に入った。さらに、avoidant因子と想定された「いつまでも仲良くしたい友だちはいない」が因子負荷量.30という低い値を示した。しかし、全体として表象レベルでのIWMは児童期にはすでに形成されているとみられる。

一方、母子関係に関する質問項目の因子分析の結果、次の8因子解が選択された。すなわち、不安定愛着因子、安定愛着因子、外向性因子、内向性因子、身辺自立因子、母親からの自立因子、母親からの分離因子、母親への情動的依存因子である。

IWM各因子と母子関係各因子間の関連を検討するため、因子得点の相関係数を算出したところ、IWMのambivalent因子と母子関係の内向性因子、母親への情動的依存因子に低い正の相関がみとめられた。また、secure因子と母子関係の外向性因子、母親からの自立因子、母親からの分離因子との間に低い正の相関がみられ、IWMのavoidant因子と母子関係の外向性因子にも低い正の相関がみられた。行動レベルでの母親を中心とした対人経験の諸相とIWMとに比較的低い相関しか得られなかった理由の一つは、2年生と4年生の両者を込みにして分析したことであろう。そこで各因子について学年差、性差を検討した。

2. 学年差と性差

各因子の平均得点をもとに学年差と性差を検討したところ、IWMのsecure因子では2年生、女子が高く、avoidant因子では男子が高い。母子関係においても、安定愛着因子は2年生、女子が高く、不安定愛着因子では4年生、女子の方が高いことがみとめられた。一方、内向性因子と母親からの分離因子では2年生、男子で高く、身辺自立因子で4年生、母親への情動的依存因子で女子が高いことがわかった。

さらに詳細にこれらの傾向を調べるため、項目毎に反応分布の分析を行った。IWMのほとんどの項目には学年差がみられ、2年生の方がambivalent傾向が強く（8項目中4項

目）、secure傾向とavoidant傾向は全ての項目で2年生の方が強かった。4年生は「わからない」反応が多く、因子得点の結果とあわせてみると、IWMが特定の変化を示すのではなく、質問に対する反応の仕方が変化するのではないかと考えられる。

一方、母子関係の発達的变化には性差も強く現れた。学年間に差がみられたのは不安定愛着因子で、肯定反応は少ないものの2年生の方が多い。また一方安定愛着因子でも、5項目中3項目で2年生の方が肯定反応が多かった。これは低学年の方が母親に対してまだ強い愛着行動を示し、その反動として逆の不安感も形成されるのではないかと思われる。身辺自立因子の全ての項目で学年差がみられ、4年生の方が自立的であった。母親からの自立因子で1項目、母親からの分離因子で2項目に学年差がみられたが、その方向性は一貫したものではなかった。母親への情動的依存因子ではほとんどが否定的な反応であった。外向性因子で学年差、性差がみられたのは1項目であったが、内向性因子には学年差が「いつも元気でほがらか」が2年生で多く、4項目で性差がみられたが一貫性はなかった。しかし、母親からの分離因子には4項目両学年で性差がみられ、男子の方が分離的であることがわかった。これらの結果から、愛着関係には幼児期の延長としての密着した低学年の母子関係から、分離的な母子関係へと変化していく様相が見てとれる。さらにこれには性差が関連しており、女子よりも男子の方がその分離は早く進むようである。

3. IWMと母子関係の発達的变化

山岸(1994)は女子青年を対象に回顧資料を用いて、現在のIWMが過去から現在までの各時期における対人関係を中心とする経験や適応感とどう関連しているか検討した。その結果、secureな枠組みを持つものは過去から現在をプラスに、ambivalentな枠組みを持つものがマイナスに捉えていること、高校時代は両者とも良好な対人経験を形成していることが示唆された。すなわち、小学生時代の

全体的印象と現在の IWMには正の相関を報告した。また、Main & Cassidy(1987)は、6歳児の IWMを調べるために人形を使った面接と物語作成を用い、母親との愛着のパターンと IWMとに密接な関連を見いだしている。しかし本研究においては、児童自身の質問紙法への回答結果からは、IWMと母子関係には強い関連はみとめられなかった。行動レベルにおいて母子関係の様相の変化は顕在化するものの、内在化された表象レベルでの IWMはかなり安定しているのではないかと考えられる。

さらに、今回の調査の対象となった2年生と4年生では、有効回答率にはかなりの差がみられ、2年生においては回答方法などに問題があったとも考えられる。本研究では、IWM及び母子関係の学年間の発達の变化と性差を調べるために、全体データの因子分析を行ったが、因子構造自体が各群で異なる可能性もある。今後、学年別の因子構造の検討を行うとともに、それぞれの相関関係の検討が必要と思われる。

〔註〕

- (1) 本研究の一部は日本心理学会第61回大会（関西学院大学、1997年9月）において発表された。なお、資料収集・分析の一部は、平成7年度卒業渡佳代子さんの協力を得た。記して感謝します。
- (2) 調査にご協力いただきました、岐阜県各務原市立那加第一小学校、那加第三小学校、稲羽西小学校、稲羽東小学校、大垣市立大垣東小学校、垂井町立岩手小学校、長野県更埴市立治田小学校の校長先生、担任の先生方、そして児童のみなさんに深くお礼申し上げます。

引用文献

Ainsworth,M.D.S., Blehar,M.C., Waters,E., & Wall,S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bowlby,J. 1976 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子（訳）母子関係の理論 I 愛着行動、岩崎学術出版
(Bowlby,J. 1969 *Attachment and Loss, vol.1: Attachment*. London: The Hogarth Press)

Bowlby,J. 1977 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）母子関係の理論II 分離不安、岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1973 *Attachment and Loss, vol. 2: Separation*. London: The Hogarth Press)

Bowlby,J. 1981 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）母子関係の理論III 愛情喪失、岩崎学術出版 (Bowlby,J. 1980 *Attachment and Loss, vol. 3: Loss*. London: The Hogarth Press)

遠藤利彦 1992 愛着と表象——愛着研究の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観 心理学評論, 35, 201-233.

Fagot,B.J. & Kavanagh,K. 1990 The prediction of antisocial behaviors from avoidant attachment classifications. *Child Development*, 61, 864-873.

Fonagy,P., Steele,H., & Steele,M. 1991 Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 60, 201-213.

Hazan,C., & Shaver,P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

繁多進 1988 母子関係研究の展望 心理学評論, 31, 4-19.

桑田照美 1993 母親の内的作業モデルと子どもの愛着との関連 平成5年度東海女子大学卒業論文

近藤清美 1993 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定 発達心理学研究, 4, 108-116.

Kobak,R.R., & Sceery,A. 1988 Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation and representations of self and others. *Child Development*, 59, 135-146.

久保田まり 1995 アタッチメントの研究：内的作業モデルの形成と発達 川島書店

Main,M., & Cassidy,J. 1988 Categories of responses to reunion with the parent at age six: Predictable from infant attachment classification and stable over a one-month period. *Developmental Psychology*, 24, 415-426.

Main,M., Kaplan,N., & Cassidy,J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment*

児童における内的作業モデルと母子関係

- theory and research* (pp.233-256). *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50(1-2, Serial No.209).
- 宮本邦雄 1994 女子青年の母性準備性と内的作業モデル 日本発達心理学会第5回大会発表論文集、279.
- 宮本邦雄 1997 女子青年の母性準備性と内的作業モデル—高校生、大学生、看護専攻学生の比較— 日本発達心理学会第8回大会発表論文集、217.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報、196, 1-16.
- 戸田弘二 1990 女子青年における親の養育態度の認知とInternal Working Modelsの関連 北海道教育大学紀要(第1部C) 41, 91-99.
- 戸田弘二 1991 アタッチメントとその後の人間関係 繁多進他編 社会性の発達心理学 福村出版、108-122.
- Turner,P.J. 1991 Relations between attachment, gender and behavior with peers in preschool. *Child Development*, 62, 1457-1488.
- 山岸明子 1994 女子青年の内的作業モデルと過去から現在の対人的経験との関連 順天堂医療短期大学紀要、5, 52-63.